

壮春力歩

会長 鈴木 末一

笑顔さんと残念さん

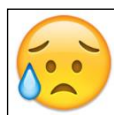
先月号でプロジェクト活動における「評価」という営みについて考えてみました。より具体的なプロジェクト活動の一例を取り上げて思いを巡らせてみたいと思います。

「文字情報があたりまえにある社会を目指します」というミッションのもとでの活動、つまり聴覚に障がいを持つ人たちに、手話ではなく文字情報で同時通訳的に情報を伝達するプロジェクトについて考えてみます。



このような支援活動を通してのアンケートに、次のような意見が寄せられていました。

- Aくん(小学4年生)：皆と一緒に笑えてうれしい。
 - Bさん(小学5年生)：毎日、全部の授業でしてほしい。
 - Cくん(小学6年生)：友達と同じタイミングで情報が受け取れて、一体感を感じられた。
 - Dくん(中学1年生)：聞こえなかったり不安に思う部分を、文字で確認できて授業がよくわかる。
 - Eさん(短大生)：授業中の先生が、こんなにたくさん話すのだとはじめて知った。自分に聞こえていない部分があることに気付いた。
 - 先生：学力がないと思っていたが、聞こえていないだけだと気付けた。
 - 校長先生：そもそも「伝わる授業とは？」から考え直すきっかけをもらった。
 - 親：聞こえないと参加が難しい授業は、前日から不安定になっていたが、支援が入る日は、うれしそうに安心した表情でいる。
 - 企業：聴覚障がい従業員も一緒に会議に全員参加できるメリットに気付けた。
 - 聴覚障がい従業員：会社が自分のためにサービスを入れてくれて、存在価値を実感でき、会社に貢献できるようになりたいと思った。
- 以上のような声が、みんなと一緒に笑いたい、学びたいの想いを支えるという価値判断では、「笑顔さん」と位置づけることになります。



次に挙げます声は、価値判断では、「残念さん」ということになります。
Fくん(小学5年生)：授業以外でも、いろいろな時に文字になってほしい。

Gさん(小学6年生)：休み時間とか友達と遊ぶ時に文字になって欲しい。

中高生・短大生・大学生：入力しきれない部分があって、全ての情報が手に入らない。遅れて出てくるので、同時に出てきて欲しい。

兄弟：犠牲になっても、頑張って支えないといけない。本当は理解や共感が欲しい。

親：親が関わらないといけない部分があり、手間がかかりすぎる。

校長先生：横に補助員を配置したほうが担任も楽である。

教育委員会：経費が出てくる制度がない。

企業：経費がかけられない。補助制度がない。

以上は、このようなプロジェクトについて寄せられたアンケートの中の様々な声のごく一部に過ぎません。しかし、「笑顔さん」と「残念さん」グループに分類を試みることにより、誰が何をしたいのか。また、何をしたいのかを、ヒアリングを通して体系的に把握することができます。4月号でも触れましたが、「評価」という営みについて改めて考えることが大切です。

リアルタイムの文字情報提供のプロジェクトが、何故普及していかないのかに思いを巡らせてみますと、支援する側からの評価ではなく、支援を受ける側にスタンスを置いたヒアリングが大切であることが分かってきます。つまり、アンケートやヒアリングにあたっての問いかけの言葉も見直すことが求められます。

このように目的を持った評価でなければなりません。ただ単なる説明責任のための評価だけが評価ではないのではと考えられます。

評価とは、体系的な情報収集に基づく事実の特定、つまり調査に一定の明確な基準に基づく価値判断がプラスされたものであるといえるのではないのでしょうか。

「笑顔さん」と「残念さん」の分類にチャレンジしてみようではありませんか。